

異常気象を意識したコンパクトで丈夫な稲づくり 良質苗の適正な田植えと水管理で初期生育確保！

ここがポイント！

- 1 夏期の高温対策として作期幅の拡大に努める
- 2 活着までは水深3～4cmを保ち、活着後は2～3cmのやや浅水管理とする
- 3 除草剤は適期を逃さず散布し、散布後は湛水状態を保つ
- 4 5月下旬以降、活着後「夜干し」実施等によるワキ対策を徹底する

1 田植え作業

(1) 田植え日

ア 常態化する夏期の高温対策として、コシヒカリの田植えは5月10日以降を基本とする。また、収穫時期の作業分散を考慮し、段播きや直播栽培の導入等作期幅の拡大に努める。

イ 田植え時期から逆算し、適期播種により規格苗を育成する（稲作技術情報 No. 1 参照）。

ウ 発根・活着を良好にするため、田植えは好天日に行う。特にプール育苗は低温に弱いので注意する。

(2) 栽植密度、植え付け本数

ア 籾数を適正に制御し、品質低下を防ぐため、コシヒカリの栽植密度は平坦地で50株/坪、山間地で50～60株/坪を基準とする。

イ その他の品種の栽植密度は50～60株/坪を基準とし、品種の特性、移植時期や土壌の肥沃度により調節する。こしいぶきは60～70株/坪とし、肥料の過剰施用を避け、適正な生育量にする。

ウ 過繁茂、細莖化による倒伏や品質低下を避けるため、植え込み本数は1株当たり3～4本とする。つきあかり等莖数が増加しづらい品種は4～5本とする。

エ 下位分げつの発生を促進するため、植え付け深さは2～3cmとする。

2 田植えから中干しまでの水管理

- (1) 田植え後から活着するまで（田植え後7～10日間位）は水深3～4cmの保温的管理とする。低温や強風の場合は、植え傷みを避けるため4～5cm程度のやや深水とする。

- (2) 下位分げつの発生を促すため、活着後は2～3cmのやや浅水とする。
- (3) 水を更新する場合は、早朝にかん水し日中は止水として水温の上昇を図る。
- (4) 活着後、ワキや藻・表層剥離が大量発生する前に、早めに水の入れ替えや夜間落水をする。

3 除草剤の効果を最大限に発揮

- (1) 丁寧な畦塗りや代かきで漏水を防止し、田面を均平にする。
- (2) 初期剤は、河川などへの流出を防止するため、田植え時または田植え後に散布する。
- (3) 雑草の葉齢をよく確認し、散布適期の範囲で早めの散布を心がける。
- (4) 散布後は、剤に合わせた水深を確保する(粒剤は3～5cm、フロアブル剤は5cm程度、ジャンボ剤・豆つぶ剤は5～6cm程度)。処理後7日間は止水とし、4～5日間は湛水状態を保つ。
- (5) 農薬使用は製品ラベルに記載されている使用基準や注意事項、使用方法をよく読み、内容を遵守する。

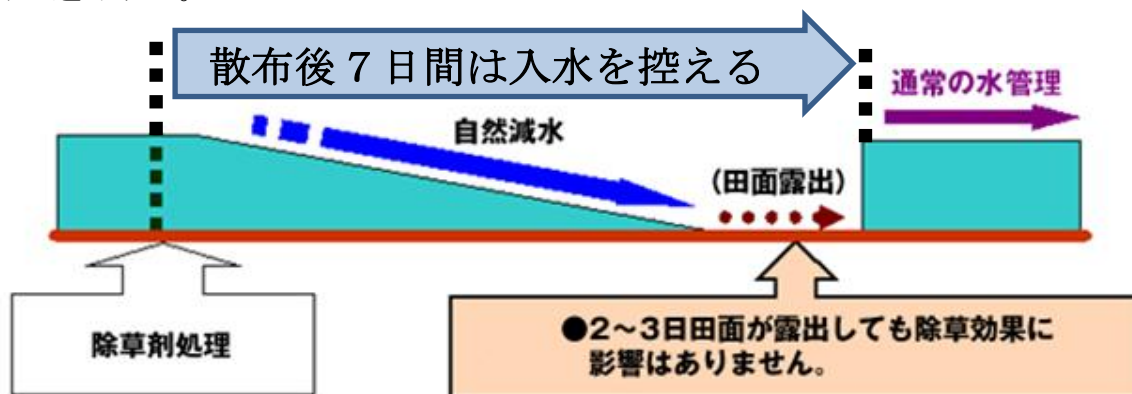


図1 除草剤散布の水管理のイメージ

4 新之助栽培のポイント

- (1) 出穂25日後までの用水確保や土壌の肥沃度等を考慮し、作付ほ場を選定する。
- (2) 田植えは稚苗植えて5月中旬頃をめやすとし、経営規模や標高、水利条件等を考慮した上で適切に設定する。
- (3) 適正な生育量に制御するため、栽植密度は50株/坪を基準とする。
- (4) 葉いもち防除(箱施用または水面施用)は、必ず実施する。



稲作メールマガジン登録募集中!

気象や生育状況に基づいた水稻栽培のポイントをお届けします。

<申込先> ngt112130@pref.niigata.lg.jp またはQRコードから→

件名に「水稻情報メルマガ登録希望」、本文に「お名前」「住所」「電話番号」をご記入ください。

※登録された個人情報はメルマガの配信以外には使用しません。

迷惑メール設定等をされている方は、ドメイン指定等により受信できるようにしてください。

